
最強の雷獣と落ちこぼれの魔獣使い

勝利 g

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強の雷獣と落ちこぼれの魔獣使い

【Nコード】

N9452Y

【作者名】

勝利g

【あらすじ】

落ちこぼれと言われた魔獣使いが最強の雷獣と契約！？ 学院一の優等生の秘密も知っちゃって？ いろんな障害を乗り越えて、無事卒業できるのか！？ 一応ファンタジーです>><

1 (前書き)

誤字脱字がありましたらご指摘お願いします。

魔法世界、レグアニア。

魔獣使いを育てるエンティクスト学院。

荘厳な、というより古臭いといったほうがあっている装飾が施された教室の中、春のぼかぼかとした日差しに当てられて、俺、ロスト・クレイグはまどろみの中にいた。
が、横から声がかけられる。

「ロストくん！ 起きなつて！ 授業終わったよ？」

良く通るアルトボイスだ。

こんな声を出す知り合いは一人しかいない。俺はしぶしぶながらも意識を覚醒させ、首を声の主のほうに向ける。

ふわぁ…と大あくびをしてから、俺は口を開いた。

「なんか用か？ ルイス」

ちよつと垂れ目で人の良い同級生、ルイスは困ったように笑った。

「なんか用かって言われても、次は実技だから草原まで行かないと」

「あー…、ついにこの時がやってきてしまったか…」

俺はルイスの説明に深刻そうな表情を作って答える。

ほかの生徒にとってはたいしたことのない授業なのだろうが、俺に

とっては大問題だ。
だが、その理由を説明する前に。

ここ、俺の通っているエンテイクスト学院は三百年の歴史を誇る魔獣使いの学院だ。

魔獣使いについての説明をするには少し長くなってしまいが、歴史の授業の反芻だ。

レグアニアを三百年前まで支配していたのは、少数の魔法使い達だった。

強大な力を持ったそいつらは、魔法を使えない者たちを無力民と呼ばび、差別して圧政を行っていた。

しかし、一人の無力民の学者が、魔獣のすむ世界『エニグマ』への道『ゲート』を開いたことで世界は一変する。

無力民は魔獣と契約し、魔法使いに匹敵する力を手に入れ、自分たちのことを魔獣使いと呼んだ。これが魔獣使いの発祥である。

魔法使いと魔獣使い。力が同じなら勝つのは当然、数の多い魔獣使い。

『聖戦』と呼ばれたこの戦いで、魔法使いのほとんどは死に絶えることとなったが、魔法使いの王が最後の悪あがきに、己の命をすべて魔力に変換。

魔法生物『ルキア』を世界中に放ってしまった。

魔獣使いはルキアに対抗するために、ゲートの開いている場所に聖都ルミティアを建国。

魔獣使いを育てる学校『エンテイクスト学院』を創った。

だが、俺はそのエンテイクスト学院において、今現在「落ちこぼれのレッテルを貼られている」。

それは俺の抱えている大問題の結果ともいうべきものなのだ。

「と、とにかく行くこうよ。このままじゃ遅刻するよ?」

「そつだな」

多少焦りの色を顔に浮かべたルイスの提案に俺は言葉と共に首肯した。

俺はルイスと連れ立って三年グリフォンクラスの教室を出る。それから大きな校舎の西側に建設されている魔獣の飼育施設『草原』へと向かった。

クラスは、『ガーゴイル』『グリフォン』『グレムリン』の三つ。魔獣と契約するために一年間も一緒に勉強して来たのだが、クラスメートどもは俺とルイスを置いて先に行ってしまったらしい。薄情なやつらだ。

ルイスは入学式の時に俺の横に座っていたやつで、意外と話が合うためつるんでいる事が多い。ちなみに俺とルイスが十六歳で同じ年だと知ったときは驚いた。

早歩きで校舎の中を歩いていると、ルイスが話しかけてきた。

「そついえばさ、ロスト君」

「あんだよ？」

「ずっと前から気になってたんだけど…。その髪と目の色、おじいさん譲りって本当？」

俺の目つきの悪い眼球の色とそれを隠す髪。漆黒の髪に翡翠色の目は、確かにルイスの言うとおり祖父の遺伝である。

だが、それは俺にとってはコンプレックスにしかならないので封殺する。

「んな話より、足動かさねーと本気で遅刻すんぜ？ あの暴力教師に体罰食らうことになるぞー」

「えー！？ 今日の実技担当ってジルマス先生だったっけ？」

ジルマスとは、二つ名が体罰の鬼という毛深い筋肉の塊のような教師だ。

それに本人の魔獣もゴリラのようなのだから笑えてくる。首を縦にこくこくと何度も振って肯定の意思表示をすると、ルイスの顔が青ざめた。

「僕あの先生苦手なんだよ！」

早歩きから小走り、小走りから全力疾走へ。ルイスは一瞬で移行すると俺を置いて走り去ってしまった。

俺はその背中を見ながら一言。

「嘘だよ」

短くつぶやく。

今日の実技担当は生徒に甘いフローウエルだったはずだ。

俺は自分のペースを守りながら、悠々と草原へと向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9452y/>

最強の雷獣と落ちこぼれの魔獣使い

2011年11月28日07時47分発行